

Title	支那文化叢書第一編 支那民俗誌上巻, 永尾龍造著
Sub Title	
Author	移川, 子之藏(Utsurikawa, Nenzo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1922
Jtitle	史学 Vol.1, No.4 (1922. 8) ,p.146(624)- 147(625)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	東西新史乗
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19220800-0146

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

事を、著者が尤もらしく、鹿爪らしく、即席料的に扱つたに過ぎない。強ひて新味を求めたならば、其の新味は著者の用語の不精確であり、其推論の森嚴を缺いたものである。Collective mind を三代言的に極力否定しながら、自分は Common life といひ、Common Will と平氣で書いて居るのは、どうしたのだ。本書の著者と、マクデユガル教授との間に起つた其の Collective mind に關する爭論は、殆んど十年に亘つて居るが、著者の三百的論法は、未だに尾を曳いて居る。要するに、本書は、初學者への入門としては、偏見に富むで居るし、専門家の參照としては、新味を缺くと同時に餘りに前賢を無視したのが弱點である。

最後に譯文を一言する。譯者は、普通に運べば五百頁になるものを其の半額に壓搾した。多少の無理は、問題でないが、譯語の苦心は察するに餘りある。『一如』、『行者』、『物界法』等の如き佛經語の轉用は其の證據だ。(若宮卯之助)

支那文化叢書 支那民俗誌上卷 (永尾龍造著) 第一編 滿洲考古學會發行

過日、大連なる著者より上述の書一卷惠贈せらる。著者は卷首に本書上梓の趣意を次の様に述べて居られる。『滿洲位我が同胞に誤解されて居るところは有るまい。又支那位我が同胞に親しみの少ない國はあるまい。我が同胞の眼は皆歐米に注がれ、心は皆その方へ引かされて居る。何んとかして此の弊を矯めなければならぬ。といふ事が吾々同志の間に考へられ始めた。理窟を云つても始まら無い。趣味を以て導かうでは無いかといふ相談の下

に、支那文化叢書は生れる運びに成つた。そして其結果一番始めに選び出されたのが本書である』と。

本書收むる處の記事の大半は初め『雜誌滿蒙の文化』に連載されたものなるが訂正増補の上本年二月中旬始めて單行本として滿洲考古學會より發行せられ去月上旬迄に三版を重ねられたものである。本卷には支那の年中行事主として正月の部を取纏められてある、爾餘の行事に關する記事は續いて上梓さる、模様である。上、中、下、外、篇の四ツに分たれ、更に細別すれば、

上篇「春立つ頃」

一章、立春——はしがき、立春の儀式、春牛、芒神、迷信、

二章、竈祭り——はしがき、竈神の昇天、竈神の祭、竈君昇天

の通路、竈祭は男子の祭、神様の下界調査、

竈祭の日につきて、竈祭の由來、竈神の身分、

竈祭と迷信、

三章、除夜——除夜、財神賣り、接神の禮、注意すべき起居

動作、山京苦力の留守宅、押歳錢、除夜雜俎、

宮中の歳末、

中篇「年の始」

一章、正月氣分——はしがき、桃符、柳、春聯、福、蝙蝠の話、

門神、鍾馗、門松、水を汲まぬこと、掃除せ

ぬこと、封印、爆竹、

二章、元日——はしがき、封門、開門、元日早朝の儀式、天

地を拜すること、四方の神を拜すること、家

堂を拜す、竈君を拜す、貧乏神落し、廻禮、

正月の食事、饅頭、開嘴、擦嘴、藤香罈、正月の飾物、元旦雜俎、堂子を祭る、清朝宮中の正月、

三章、「元日を過ぎて」——財神の祭り、小年朝、掃晴娘、接路頭、破五、店開きと里歸り、人日、鼠の嫁入り、七草、星祭り、玉帝誕生、

下篇、「元宵の祭り」

一章、燈節——はしがき、燈市、黄河九曲燈、雲開節、上燈、

試燈、

二章、元宵——天官賜福、行燈秧歌、燈籠と花火、婦人の迷信、占卜、食事、遊戯、

三章、元宵趣話——青衣靈神、紫姑三姑、明月笛聲、初術觀燈、白馬馱經、貧家一燈、擲水悲劇、樂昌合鏡、月中人影、

四章、元宵のあと——走百病、雨夜の燈を買ふ、會神仙、燕九節、補天、小元宵、填倉、竊九、送窮鬼、

外篇、「蒙古の正月」

はしがき、

一章、年の暮れ——火の祭、煤掃き、布和樂と供佛、壓歲錢、

守歲、

二章、正月、——元旦、鳥叉、星祭り、墨の塗り合ひ、出行、

東大廟の跳鬼、青海蒙古の元日、

と云ふ内容と順序である。

支那に關する著書は随分多いけれども斯る内容と深き民俗に

對する理解とを持つて一般讀者の爲めに書かれた書は稀有であると思ふ。加ふるに行文頗る平易、流暢、蓋し有益なる好著である。

——發行所、大連東公園町滿鐵圖書館内、滿洲考古學會。
定價參圓。
(移川子之藏)

Marcel Granet; La Polygamie sororale et le

Sororate dans la Chine féodale: Étude sur

les formes anciennes de la polygamie chinoise.

Paris, 1920

フレーザーは「Totemism and Exogamy」の大著によつて全世界の諸人種のトテミズム、異族結婚、ソロレイト、レベニールの習俗を網羅し盡さんとしたが、極東、即ち南方支那より日本にかけての廣大なる一區域は、全く白紙として取殘されておる。けれど西歐の學者によつて、漢字の典籍を利用することは至難の業であるからである。Marcel Granetは、一九一二年の Young Pao (Vol. XIII) に “Coutumes matrimoniales de la Chine antique” なる論文を發表し、早くから上代支那の結婚習俗に注意しておつたが、最近 “La Polygamie sororale et le Sororate dans la Chine féodale” なる著書によつて春秋時代の封建諸侯の結婚習俗を研究し、之をフレーザーの Theory によつて説明せんとした。氏は、まづ春秋左氏傳、史記、詩經、儀禮、禮記等に散見する勝の制度、即ち諸侯の始めて妻を迎へる場合、その夫人と同姓なる姪姉を副